

近現代の奈良における貝釦製作残滓

1 はじめに

貝釦生産は、1877年頃に神戸で開始され、1905年頃に奈良県の川西町などでおこなわれるようになった。その背景には農家の副業であった大和木綿織の衰退があり、貝釦生産はそれに代わる副業として普及した¹⁾。現在でも、貝釦は奈良の重要な地場産業となっている。

2006年に元興寺文化財研究所がおこなった平城京右京一条三坊一坪の発掘調査において、近現代の大土坑から多量の貝釦製作残滓が出土した²⁾。資料の一部は採取され、環境考古学研究室において分析をおこなったが、報告書では詳細に触れられなかった。そこで本稿では、出土資料の報告をおこなうとともに、貝釦の素材獲得や製作技術について検討を加えていく。

2 出土状況

貝釦の製作残滓は、調査区南辺の大土坑（SK500）から出土した。現地表面のアスファルトおよびその下位の表土層を重機で掘削する過程で確認されたため、2基の土坑が切り合っていたとみられるが、前後関係は不明である。掘削後の規模は、東西8.5m、南北5.0m以上、深さ1.0mであった。埋土はすべて貝殻で構成され、貝殻どうしの際間に土砂の進入がほとんどない状態であった。近現代の資料と考えられるが、共伴遺物がないため、詳細な時期は不明である。

3 素材獲得

出土した貝類は86点で、ガマノセガイ属（複数種）*Lamprotula* spp.が81点（94.2%）と卓越し、その他にクサビイシガイ属*Cuneopsis* sp.が3点（3.5%）、シジミ属*Corbicula* sp.とイシガイ*Unio douglasiae*が1点（1.2%）ずつであった。すべて淡水性の貝類である。

とくにガマノセガイ属とクサビイシガイ属は、日本には生息せず、主に中国に分布する種である³⁾。したがって、この貝釦の素材は、中国の淡水域で採集され、日本に持ち込まれたものと考えられる。以下、紙幅の都合により、貝釦素材となったガマノセガイ属とクサビイシガイ

イ属を「貝釦残滓」と一括して論を進めることとする。

また、貝釦素材とならないシジミ属やイシガイもわずかながら出土していた。これらの貝類は、貝釦残滓と同じ淡水域に生息する貝種であるため、素材獲得の際に混獲されたものと推測される。

4 貝殻選別

貝殻から釦生地を繰り抜く前に、まず貝殻の選別がおこなわれる。これは、素材となる貝殻を効率的に使用できるように、不良品を除いたり、繰り抜く貝釦の大きさに応じた貝殻サイズを選別したりする工程である。

素材に適さない貝殻 ほとんどの貝釦残滓に繰り抜かれた痕跡が認められた。しかし、未加工の資料が2点（2.4%）存在した。伴井比呂志氏のご教示によると、この未加工の貝釦残滓は、真珠光沢が光らずに濁っていることから「ヤケ貝」である可能性が高いという。ヤケ貝とは死貝のことで、釦を製作するとボロボロに欠けてしまう。そのため、この未加工の2点は、釦生地を繰り抜く前の段階で、素材に適さない貝殻として選別・除外されたものと推測される。

素材となった貝殻サイズ 出土した貝釦残滓84点のうち44点が、殻長の計測が可能な個体であった。計測の結果、50～60mmの範囲が最頻値となるが、30～90mm台までの貝殻が素材として用いられたことがわかる（図99）。

5 繰り抜

「繰り抜」とは、原材料の貝殻から円形の釦生地を繰り抜く工程である。貝釦製作を開始した当初は剪刀や鏝で繰り抜がおこなわれ、1879年に貫透線が発明されたことに

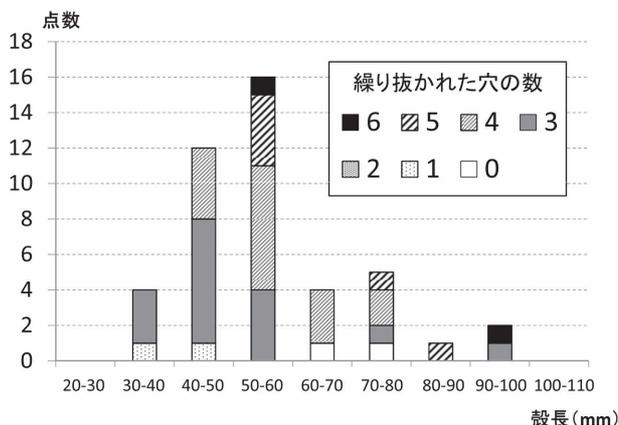


図99 貝釦残滓の「殻長」と「繰り抜かれた穴の数」

より製品の均一化が可能となった。さらに1890年代以降にはボール盤が使用されるようになる^{4) 5)}。奈良で貝釦製作が開始された1900年頃以降は、ボール盤による繰抜がおこなわれていたと考えられる。

釦生地採取の歩留 繰抜痕跡は1つの貝殻で複数個所に存在した(図100)。貝釦残滓の「貝殻サイズ」と「繰り抜かれた穴の数」を検討すると、大きな素材だけでなく、小さな素材でも複数の釦生地を繰り抜いていることが確認できる(図99)。したがって、素材の大きさや形状に合わせて、大小の釦生地を組み合わせる繰り抜くことにより、1つの貝殻から効率よく繰り抜けるように、釦生地採取の歩留を高める意図がうかがえる。

繰抜技術の検討 繰抜に用いられたボール盤を検討すると、錐先が円筒型になっており、動力により錐先を回転して貝殻から円形の貝を繰り抜き、内側のゴム芯で押し出すようになっている(図101)。また、錐先を交換することで、様々な釦生地サイズを作ることができる^{5) 6)}。完全に繰り抜かれずに痕跡が残された資料を観察すると、①貝殻外面から釦生地が繰り抜かれたこと、②用いられた錐先縁辺の幅が約1mmであること、③釦生地の大きさが異なっても錐先縁辺の幅は約1mmと共通すること、が確認できる(図102)。

釦生地サイズ 出土した貝釦残滓84点で251カ所の円形の穴が繰り抜かれていた。この穴を計測すると、直径は6.91～27.45mmまで存在し、集中する範囲がいくつか認められた。錐先縁辺の幅を考慮して釦生地のサイズを推定すると、約5.0～25.5mmまでの釦生地を繰り抜き、とくに7.5～8.0mm、9.0～10.0mm、12.0～13.0mm、15.0～16.0mmの釦生地を多く製作していたことがわかる。

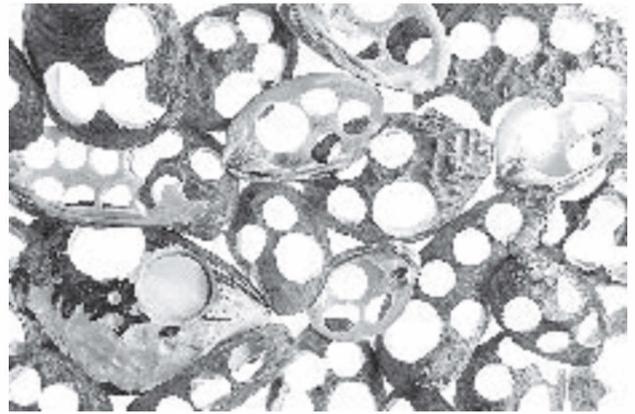


図100 出土した貝釦製作残滓

遺跡から出土する貝釦は、近現代の奈良における産業を考える上で貴重な資料である。今後、出土事例を蓄積した上で改めて検討を加えていきたい。ただし、貝釦などの近現代資料は「遺物」として認識されていない可能性が考えられる。本報告が今後の資料蓄積につながれば幸いである。(山崎 健)

謝辞

本稿の執筆にあたり、種同定に関しては松岡敬二氏と石井久夫氏から、貝釦製作に関しては株式会社トモイの伴井比呂志氏からご教示を得た。また、狭川真一、角南総一郎、牛嶋茂、次山淳の各氏からご教示やご配慮を賜った。記して感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 川西町史編集委員会編『川西町史』2004。
- 2) 狭川真一編『平城京右京一条三坊一坪』元興寺文化財研究所、2008。
- 3) Matsuoka, K. 「PLIOCENE FRESHWATER BIVALVES(LAMPROTULA AND CUNEOPSIS : UNIONIDAE) FROM THE IGA FORMATION, MIE PREFECTURE, CENTRAL JAPAN」『Transactions and proceedings of the Palaeontological Society of Japan. New series』149, 1988。
- 4) 石井六治郎編『日本貝釦同業組合沿革史』1929。
- 5) 竹内常善「都市型中小工業の農村工業化事例—大阪府の貝釦生産を中心に—」『広島大学経済論叢』2-3・4, 1979。
- 6) 労働省職業安定局編『貝釦製造業』職務解説第134輯、1953。

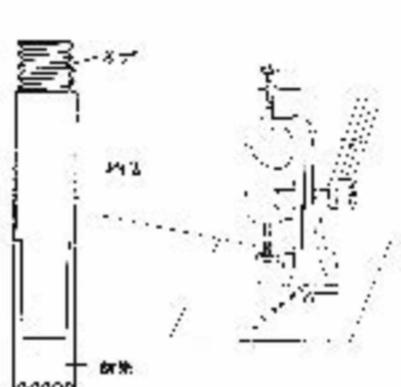


図101 繰抜に用いたボール盤と錐先の一例
(労働省職業安定局編1953より作成)

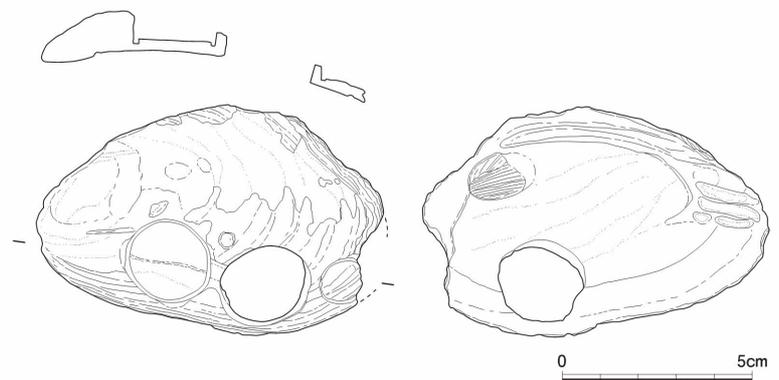


図102 繰抜痕跡が残された貝釦製作残滓 1:2